

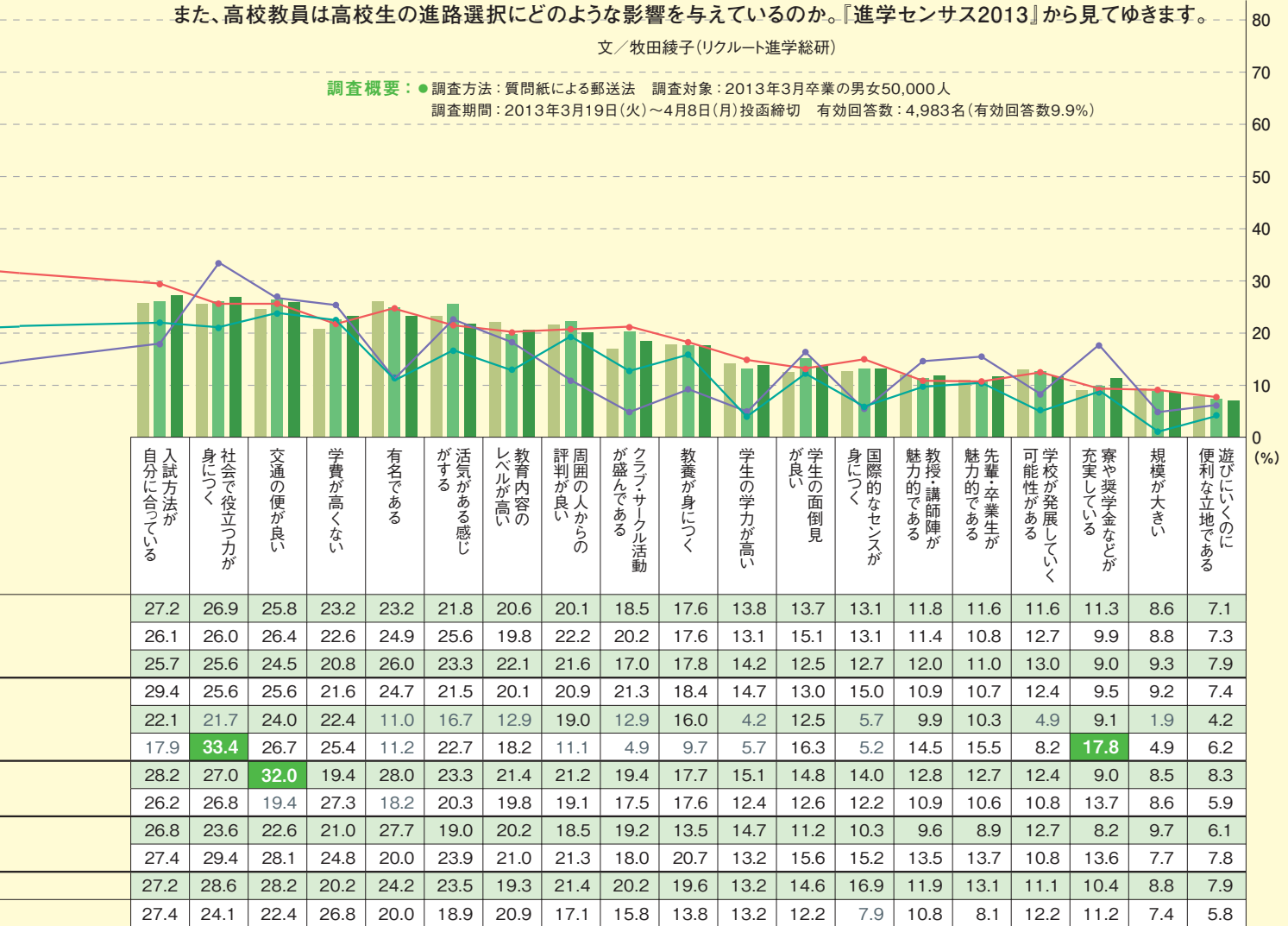
高校生 進路選択のいま

高まる実利志向、身近で手堅く進路選択

小社では、2年に1度、その年の高校卒業生に対し、自身の進路決定プロセスを振り返ってもらう調査を行っています。ここ数年は、リーマンショック、東日本大震災など、高校生の進路選択に影響を及ぼすような大きな変化が起きました。長引く不況と社会情勢の変化の中で、高校生の進路選択に対する意識はどのように変わったのか。また、高校教員は高校生の進路選択にどのような影響を与えているのか。『進学センサス2013』から見てゆきます。

文／牧田綾子(リクルート進学総研)

調査概要：●調査方法：質問紙による郵送法 調査対象：2013年3月卒業の男女50,000人
調査期間：2013年3月19日(火)～4月8日(月)投函締切 有効回答数：4,983名(有効回答率9.9%)



大都市圏：1都3県(南関東)、愛知県、大阪府、京都府、兵庫県 ローカル：左記以外2011年は東北を含まない数字

進学先に求めること 男子は「就職」女子は「雰囲気」

まず、志望校検討時に重視した項目を見てみたい(図1)。進学者全体で1位は「学びたい学部・学科・コースがある」で、やりたいこと重視の進路選択となっていることがわかる。次いで「校風や雰囲気が良い」「自分の興味や可能性が広げられる」の順になった。

重視項目については属性別に大きく志向が異なる。進学先別に見ると、大学進学者は2位が「校風や雰囲気が良い」、3位が「自分の興味や可能性が広げられる」であるのに対し、専門学校進学者は「就職に有利である」、次いで「専門分野を深く学べる」となっており、専門学校進学者は社会で働くということを強く意識していることがわかる。

男女別に見ると、全体的に女子のほうが志望校選択時における重視項目のスコアが高くなっている。それぞれの優先順位で見ると、男子は2位が「就職に有利である」であるのに対し、女子は「校風や雰囲気が良い」となっており、就職を重視している男子と、イメージや雰囲気にも着目する女子の差が明らかとなった。また、就職の観点で重視するポイントを聞いたところ、男子は「就職率」や「有名企業への就職実績」を重視しているのに対し、女子は「就職活動のサポート体制」を重視。女子はプロセスから伴走してほしいという気持ち強いようだ。

■ 高校生の属性別 進路選択行動傾向

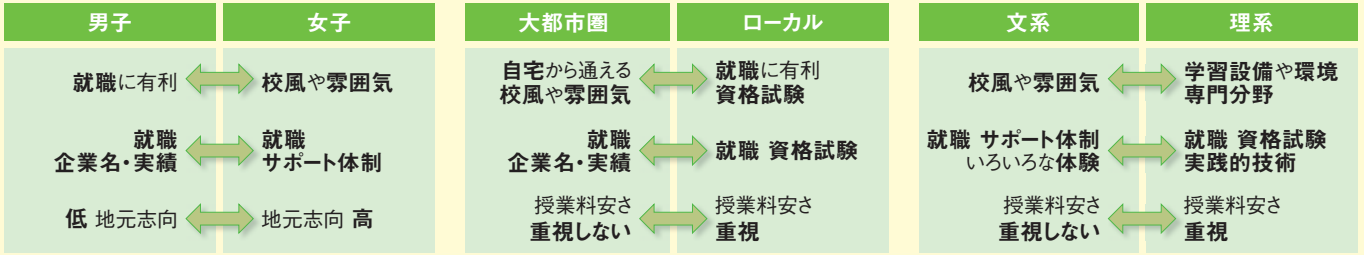
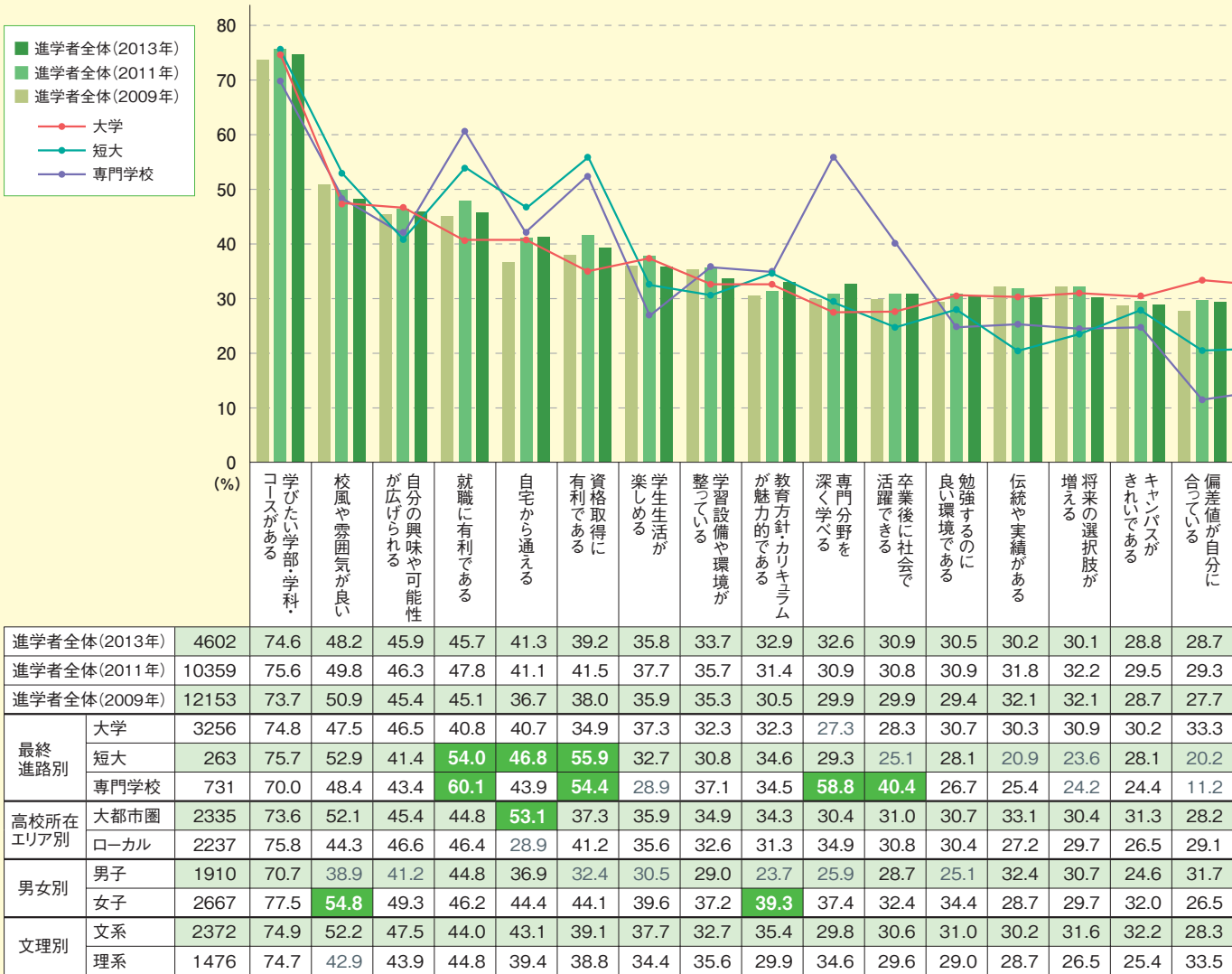


図1 志望校検討時の重視項目(進学者全体/複数回答)



100.0 「進学者全体(2013年)」より5ポイント以上高い

100.0 「進学者全体(2013年)」より5ポイント以上低い

進学者全体: 浪人生を含んだ数字

2009年から2回の調査で連続して

「学習内容」への関心が高まる

高校で生きる力など
 2009年から2回の調査で連続して「学習内容」への関心が高まる

このように、進学先、男女、地域、文理など、属性別に高校生の関心は大きく異なるため、それぞれに合った指導・アドバイスが求められているといえるだろう。

また、文理でも着目するポイントが異なる。理系は実践的技術を身につけるため、整えられた学習設備で専門分野を深く学ぶことを重視するが、文系は校風や雰囲気を重視。また、理系は授業料の安さもポイントだ。

高校所在エリア別でも、顕著な傾向の違いが見受けられる。後述するが、大都市圏では地元に進学したいという志向が高いため、「自宅から通える」「交通の便が良い」など通学の範囲や手段に対する関心が高い。一方、ローカルエリアでは「学費が高くない」「資格取得に有利」など実利的な項目が高くなっている。重視項目は地元進学志向との相関がありそうだ。

図2 志望校検討時の地元選択志向(進学者全体/単一回答)

			残りたい・計		どちらでも良かった	離れたたい・計		無回答		残りたい・計	離れたたい・計
			ぜひ地元に残りたいと思っていた	できれば地元に残りたいと思っていた		できれば地元を出たいと思っていた	ぜひ地元を離れたたいと思っていた				
●凡例											
進学者(浪人含)全体 (n=4602)			31.7%	17.3%		22.3%	9.8%	9.0%	9.9%	49.0	18.8
最終進路別	大学 (n=3256)		31.8%	16.9%		22.1%	9.6%	8.8%	10.8%	48.7	18.4
	短大 (n=263)		33.8%	17.5%		22.1%	8.0%	8.0%	10.6%	51.3	16.0
	専門学校 (n=731)		32.6%	19.2%		22.7%	10.1%	7.1%	8.3%	51.7	17.2
高校所在エリア別	北海道 (n=175)		24.6%	12.0%	23.4%	17.1%	12.0%	10.9%	36.6	29.1	
	東北 (n=286)		19.9%	13.6%	29.4%	16.8%	11.9%	8.4%	33.6	28.7	
	北関東・甲信越 (n=443)		18.1%	17.4%	26.0%	15.1%	14.2%	9.3%	35.4	29.3	
	南関東 (n=1417)		45.6%	19.3%	18.1%	3.1%	3.0%	10.8%	64.9	6.1	
	東海 (n=565)		27.1%	17.9%	25.8%	11.7%	9.9%	7.6%	45.0	21.6	
	北陸 (n=128)		18.0%	15.6%	18.0%	21.1%	15.6%	11.7%	33.6	36.7	
	関西 (n=796)		35.2%	20.2%	22.1%	6.0%	6.7%	9.8%	55.4	12.7	
	中国・四国 (n=385)		18.7%	12.5%	22.6%	16.9%	17.9%	11.4%	31.2	34.8	
	九州・沖縄 (n=377)		24.4%	13.8%	23.6%	13.5%	14.3%	10.3%	38.2	27.9	
男女別	男性 (n=1910)		28.4%	18.8%	23.1%	9.6%	9.7%	10.3%	47.2	19.4	
	女性 (n=2667)		33.9%	16.3%	21.7%	9.9%	8.5%	9.7%	50.2	18.4	

進学者全体：浪人生を含んだ数字

重視度が高まっているのは、学習内容と「地元進学・学費」に関する項目である。まず、学習内容では「教育方針・カリキュラムが魅力的」「専門分野を深く学べる」「卒業後に社会で活躍できる」「社会で役立つ力が身につく」が増加している。単に学問を学ぶだけでなく、将来を見据えて、社会で役立つ力を身につけたいという意識がうかがえる。

その背景には、現在の高校生が9・11事件やリーマンショック、東日本大震災など世界規模の出来事が多発する中で、多感な時期を歩んできたことが少なからず影響しているだろう。加えて、現在の高校生は「ゆとり(世代)」であることを世代の弱みと感じており(小社「高校生価値意識調査2012」)、自己肯定感が低いとの懸念も囁かれている。社会がどうなるかわからないからこそ、生き抜くための強い武器を持つて自身の拠りどころとしたい、そんな思いがあるのかもしれない。

経済的な不安や 地元進学志向も顕著に

また、「自宅から通える」「寮や奨学金」「学費が高くない」など、地元進学や学費に関する項目も、2回連続で増加している。地元志向に関しては、2009年39.8%↓2011年46.2%↓2013年49.0%と増加傾向だ。

自宅外通学者の送り額は年々減少傾向にあるが、それでも学費と合わせる

と保護者の負担は大きい。高校生や保護者を取り巻く経済的環境が、進路選択にある種の「制約」として影響しているのかもしれない。

検討プロセスを通して、 高校の先生の影響が高い

次に、高校生が進路を決定する上で影響を受けた人やメディアを検討プロセス別、進学先別に見てみたい。(図3)

将来の仕事について考え始める時期は、進学先に関係なく「家族」の影響が強い。自分のこと、そして社会を一番知っている

2011年調査と比較すると、特に南関東の地元志向が高くなっている(2011年56.1%↓2013年64.9%)。大都市圏ほど地元へ学校が多くないエリアの場合、やりたいことを学べる学校が地元でないケースもあり、選択肢が限られているということも影響しているのだろう。

長引く不況の中で、いかに経済的負担を軽くし、将来に役立つ力をつけられるか、そんな高校生の切実な思いが反映された結果となった。

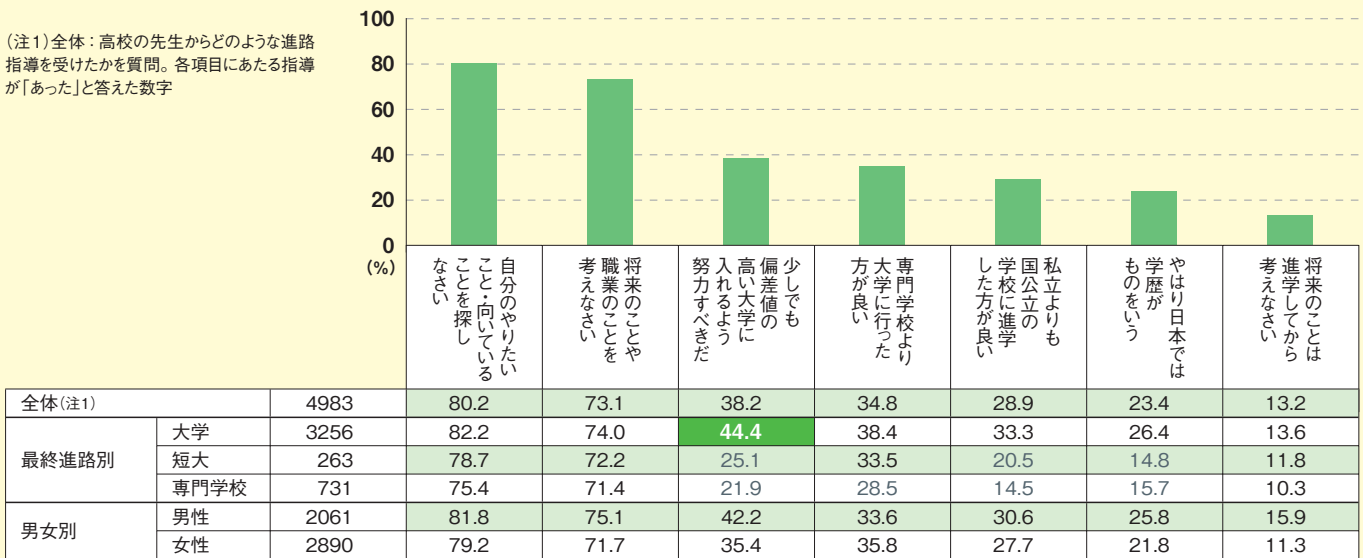
2011年調査と比較すると、特に南関東の地元志向が高くなっている(2011年56.1%↓2013年64.9%)。大都市圏ほど地元へ学校が多くないエリアの場合、やりたいことを学べる学校が地元でないケースもあり、選択肢が限られているということも影響しているのだろう。

図3 影響を受けた人・メディア (進学者全体 / 各単一回答)

	大学進学者			短大進学者			専門学校進学者		
将来の仕事について考え始めた時期	1位	家族	1位	家族	1位	家族	2位	進学情報誌	
	2位	高校の先生	2位	進学情報誌	2位	進学情報誌	3位	オープンキャンパス	
	3位	進学情報誌	3位	友人・先輩	3位	オープンキャンパス			
学んでみたい分野を決めた時期	1位	進学情報誌	1位	家族	1位	進学情報誌	2位	家族	
	2位	高校の先生	2位	進学情報誌	2位	高校の先生	3位	高校の先生	
	3位	家族	3位	高校の先生・オープンキャンパス	3位	進学情報誌			
どんな学校があるかを調べ始めた時期	1位	進学情報誌	1位	進学情報誌	1位	進学情報誌	2位	パンフレット	
	2位	高校の先生	2位	高校の先生	2位	パンフレット	3位	進学情報サイト	
	3位	進学情報サイト	3位	進学情報サイト・パンフレット	3位	進学情報サイト			
最終的に入学した学校に関心を持った時期	1位	高校の先生	1位	オープンキャンパス	1位	オープンキャンパス	2位	進学情報誌	
	2位	進学情報誌	2位	家族	2位	進学情報誌	3位	パンフレット	
		オープンキャンパス		パンフレット		パンフレット			
第一志望の学校を受験校に決めた時期	1位	高校の先生	1位	オープンキャンパス	1位	オープンキャンパス	2位	パンフレット	
	2位	オープンキャンパス	2位	高校の先生	2位	パンフレット	3位	高校の先生	
	3位	家族	3位	家族	3位	高校の先生			

図4 高校での進路指導内容 指導実施率 (全体 / 各単一回答)

(注1) 全体：高校の先生からどのような進路指導を受けたかを質問。各項目にあたる指導が「あった」と答えた数字



100.0 「全体」より5ポイント以上高い

100.0 「全体」より5ポイント以上低い

全体の降順ソート
全体：浪人生、就職者、進路未定者を含んだ数字

身近な存在として、家庭での会話が大きなポイントとなっていることがわかる。学んでみたい分野を決める際も、進学情報誌と並んで「家族」や「高校の先生」が上位に入る。

方向性が決まり、具体的にどんな学校があるかを調べ始める段階では、「進学情報誌」や「進学情報サイト」で情報収集が行われている。しかし、ここでも大学・短大進学者では「高校の先生」が2位に入っており、幅広く情報をキャッチする一方で、自分に合った学校を先生からのアドバイスで探していく姿勢が見て取れる。

志望校の絞り込みや決定段階ではどうだろうか。最終的に入学した学校に関心を持った時期、第一志望の学校を受験校に決めた時期には、大学進学者は「高校の先生」、短大・専門学校進学者は「オープンキャンパス」が1位となっている。学部・学科や入試制度の多様化により、自分だけでは決められないと考える大学進学者と、実際のキャンパスで雰囲気を知り体験実習を受けて決めていく短大・専門学校進学者の違いが明らかとなった。

全体的に見ると、どの段階においても高校の先生は上位に入っており、やはり進路選択において身近で重要な存在となっていることがわかる。

高校で受けた進路指導は「やりたいこと」重視

高校で受けた進路指導の内容をきいた

ところ、「自分のやりたいこと・向いていることを探しなさい」「将来のことや職業のことを考えなさい」が高校生の7割以上が認知するメッセージとなっていた(図4)。「少しでも偏差値の高い大学へ」「専門学校より大学へ」といった学歴志向型の指導は前二項とは開きがあり、全体としては「やりたいこと」重視のメッセージが伝わっていることがわかる。

在籍高校の大学・短大進学率別に見ると、「自分のやりたいこと・向いていることを探しなさい」「将来のことや職業のことを考えなさい」は、進学率による変化が小さく、高校の進学状況を問わずメッセージされている。一方、「少しでも偏差値の高い大学へ」「専門学校より大学へ」「私立よりも国公立へ」といった項目は進学率が高くなるほど認知率が高くなり、高校の状況に応じて指導方針が変化していることがわかる。

不況の深刻化や学部・学科や入試制度の多様化：進路選択は複雑化し、高校生は「やりたいこと」だけでは進路を選べなくなってきた。先述したように、属性によっても、家庭環境によっても、高校生の置かれている状況によって重視項目や影響を受けるものは多様化している。一人ひとりの意向や状況に寄り添ったアドバイスができる存在として、高校の先生方の果たす役割はますます重要になってくるのではないだろうか。